



## 生命との出会い 自ら挑戦すること

久保田 展史

Kubota Hiroshi

滋賀YMCA総主事  
元京都YMCA主事

全国のYMCAのキャンプ場では歴史の積み重ねの中、多くの素晴らしいキャンプが展開されました。京都YMCAでもサバエという歴史あるキャンプ場があり、歴史を積み重ね多くのキャンプを行ってきました。しかし定置キャンプ場でのキャンプ展開ではなく、キャンプ場を飛び出して行ったキャンプのなかでも長く続いた特徴的なキャンプも数多くあります。その中でも面白いキャンプの展開は将来のキャンプのヒントにもなるかと思い、キャンプ100ストーリーとして後世に残せたらと思います。

### ▼志賀高原ネイチャースタディキャンプ・糸魚川ナチュラルリストキャンプ

1984年から志賀高原の自然をテーマとした「志賀高原ネイチャースタディキャンプ」を始めました。国立公園でもあり亜高山帯の特徴ある自然の標高約1,800～2,300メートルの志賀高原で地質・植物・動物・昆虫を観察しようというキャンプです。ちょうど志賀高原観光協会も自然観察路やガイドブックなどの整備を始めた頃でした。キャンプのメインプログラムとして野生動物の観察がしたいと計画していました。当時ここで哺乳類のオコジョという動物の生態を研究している野柴木洋先生（\*1）を宿舎の方から紹介いただきました。しかし先生は当初、子どもが野生動物を観察することには、かなり否定的で「飼われている動物ではない野生生物を見るために、子どもが長時間静かに待ち続けることは無理である」と考えておられたようです。

私たちはその言葉を受け、子どもたちへの動機づけに力を入れるように考えました。事前のお手紙や電話での連絡の際、そして往路のバスの中でも時間をかけて動機づけを行いました。そしてキャンプでの動物観察当日、なんと観察ポイントの岩や木の陰に待機した子どもたちは30分以上息を殺して全く動かず話さず待っていたのです。そしてそこに野生のリスが現れたのです。子どもたちが一斉に私たちの方を振り返って「出てきた！」と、キラキラした目で訴えます。「つぶらな瞳がかわいかった」「尻尾を上下して何かを表現しているのだろうか」「ひげをこするのはにおいをかいでいるのだろうか」子ども達の観察は細やかで、その感想には喜びと感動にあふれていました。この子どもたちの姿に野柴木先生は心底驚かれたようです。子ども達も興味があれば観察ができると、その後25年以上このキャンプを支えてくださいました。

途中、先生の転居にあわせて新潟の青海町（現糸魚川市）にフィールドを移しました。青海町では町役場の若手職員の方々がボランティアグループを作って子ども達の観察の引率などをしてくださる展開となりました。また後半は、青海町の自然研究会の会員の方々がお手伝いをしてくださるようになりました。この青海町でのキャンプ、ある日息をひそめて夜間に野生のタヌキの観察をしていたときの事です。1時間以上、待てど暮らせどタヌキは現れてくれません。あきらめて皆が振り返ると、そこには地面に座り込んだタヌキの親子の輝く6つの目がありました。なんと、観察されているのは私たちだったと子ども達や先生と笑いあったのを覚えています。



志賀高原カヤノ平の霧に包まれたブナ林にて。（右が筆者）

キャンプを離れる時の子どもたちは森に向かって、「バイバイ、元気でね！」と手を振ります。子ども達には木々を通してあの狸の子ども達やリスの姿が見えているようでした。自然とつぶさに出会うキャンプは子ども達の自然への興味を高めてくれたようで、今でもリーダーや子どもたちとの交流は続いています。子ども達の多くがリーダーになってくださいました。このキャンプ100のストーリー（vol,50）で投稿された烏賀陽さんも、そのお一人です。

\*1：野柴木 洋（やしきひろし）先生：日本哺乳類学会会員、新潟県野生生物保護対策検討委員。

著書：「オコジョの不思議」どうぶつ社1995年初版、「雪国動物物語：ひげ先生のにいがた動物記」新潟日報事業1997年初版

## ▼四国アドベンチャーキャンプ、九州アドベンチャーキャンプ

2001年から「めざせ足摺岬！四国アドベンチャーキャンプ」を行いました。これはバックパックを背負って列車を乗り継いでテントを張りながら移動し、6泊7日で四国最南端の足摺岬を目指すというキャンプです。ルールとして「各駅停車の列車にしか乗らない」、「自分たちで時刻表を持ちながらグループごとに途中の様々な場所を訪れる計画をする」、「1日に食費は一人1,000円で自炊が基本」です。テントを張る場所はあらかじめディレクターの下見で決定してありますので、宿泊地は決まっています。対象は小学4年生から高校3年生の子どもたちです。テントや調理用具も手分けして運びますので、大きく重そうなザックを持つ子ども達の姿は目立ちます。電車に乗っているとご婦人たちが「ボクたちどこから来たの？」と優しく聞いてくださいます。ある時そんな様子を向かいの席でニコニコ聞いていたおばあさんが、「あの子たちに何か冷たいものでも買ってあげて！」と私の手に千円札を数枚握らせて降りてゆかれました。こんなことが1回や2回ではなく、その後も何度かありました。また芝生公園で雨の日にテントを張ったところ、近くの家の方が家からコードを延長して照明をつけてくださったり、テントサイトを目指して歩いていると軽トラックを停めて「荷物を運んであげよう！」とおじさんが声をかけてくださったり、歩いていると暑いだろうと冷えたスイカを家の中から持ってきてくださったりと地元の方々から声をかけられて親切にされることが常にありました。



高知県 JR 予土線の江川崎駅にて



愛媛県 JR 松山駅前にて道後温泉行路面電車に乗り換え

高知県の中村駅でバス乗り場を探していると、女子高生が声をかけてくださって親切に案内してくれ私たちが乗り込んで出発するといつまでも手を振って送ってくれました。愛媛県の八幡浜市の漁港の朝市を見学に行った時、いつの間にか子どもが太刀魚を1匹袋に入れて持っているのが驚いて聞くと、「漁師のおじさんにもらった」と言うのです。その後私が市場の外に出て待っていると、その子の手の袋の中の太刀魚が13匹に増えているのです。驚いていると、別の魚屋のおじさんと意気投合してお話ししているともらったというのです。「どうしよう、これから一日歩き回るのに・・・」と話していると、今度は近くにいたおばあさんが私たちの会話を聞いて、市場の若いものを大声で呼んで発砲スチロールの箱と氷を用意してくれました。さすがお遍路の国です。

重い荷物をもって歩くキャンプですがリピーターの多いキャンプとなりました。数年後は舞台を九州に移して「目指せ九州西最端・・・」「目指せ九州最南端・・・」と目標を変えて実施しました。子ども達はひとり一人時刻表を持ち、時間や乗り換えを調べながら行きたい場所を決めてゆきます。例えば『伊予三島の泊地から松山駅を経由する際に道後温泉に寄って坊ちゃん列車に乗るには何時に駅を降りて、次の列車までどれぐらい余裕を作るか』などを考えて朝の出発時間を考えるのです。時刻表を手早く調べること、時間の計画を組むこと、メニューを決めて買い物をすること、地元の方たちとできるだけ多くの会話をする事、そんな力が備わるようになりました。



目的地の足摺岬に到着！灯台をバックに

そしてキャンプが終わるころには子どもたちだけでなくリーダーたちもみんな“てっちゃん”（列車好き）になりました。毎日のメニューについては栄養バランスがとれているかを夜のリーダーミーティングでメニュー確認をし、次の日のメニューに注文を付けます。また、その土地でしか食べられないようなものはディレクターで別に購入して提供してあげたりすることで、土地の名産品も食することができる工夫をしました。四国では「フカの湯引きのからしみそ」や「カメノテの塩ゆで」など、九州では「辛子蓮根」や「馬刺し」などを味わいました。キャンプを受け持ったリーダー達も大きな影響を受けるようで、OBOGとなってからも列車旅にはまって「この夏にリュックを担いで列車を使った旅をしてきたよ」と報告をくださいます。

## ▼心に何を残してもらうか

本物の自然につぶさに会うキャンプの展開、自分たちの力で生活しながら先に進むキャンプ。いずれもそれぞれに参加した子ども達には強烈な印象が残っているようです。キャンプの進む先には、これからも子ども達への挑戦する勇気や、会うことでのやさしさのあふれる体験が待っているでしょう。私たちは子ども達の将来のために、心に何を残してもらうかをしっかり考えてキャンプの計画を練らなければならないと思います。そう、そこに多くの出会いがあることも大切にしたい。



### Profile

久保田展史（くぼたひろし）  
1959年大阪生まれ 大津市在住。  
所属教会：日本聖公会大津聖マリア教会。  
日本YMCA認証主事  
日本YMCAウエルネスキャンプディレクター  
日本キャンプ協会キャンプディレクター資格  
2018年京都府青少年健全育成成功労者・知事表彰

【取材：京都YMCA 中村彰利】